

## かん黙児との2年間の歩み

渡辺 怜子\*

### I はじめに

新学期、K子との最初の出合いの日、どの子も目を輝やかせて元気な返事を返してきたのに彼女はうつむいて涙を流した。級友は口々に「Kさん、1年から一ぺんも返事したことがないがねー。」と教えてくれた。K子はいわゆるかん黙児と呼ばれる情緒障害児であった。いつも暗い顔をしてかたくなに心をとざしているK子を見ると、なんとかしてその心の壁を開き、少しでも明るい生活を送らせることができないものだろうかとか心から願わずにはいられなかった。K子にとって学校生活は楽しいどころかむしろ苦痛につながっているのではないだろうか。過去4年間の指導要録にも登校拒否的な傾向があったことが記録されており、学年に進むにつれて悪化してきているように思える。このまま放っておいては自己実現どころか、ますますかたくなにとじこもってしまうのではないだろうか。K子の姿容を祈りながら試行錯誤の実践を積み重ねてみた。

### II 目的

かん黙児K子が、学級集団の中でどのように心を開き、かん黙の壁を破るようになっていったか、その過程を実践記録をとおして追求していきたい。

### III 対象児と問題の概要

1 対象児 小学校5年 K子(女)

#### 2 問題の概要

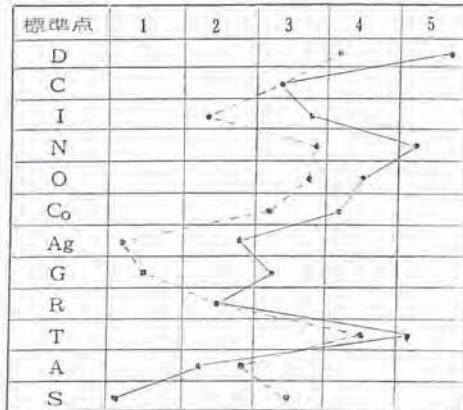
入学以来教師とはいっさい口をきいたことがなく、「はい」という返事すらできない。教師にやむを得ない用のある時は親しい友だちが通訳をする。家の近くの友だち2～3人とは普通に話して遊ぶが、教師や親しくない友だちが近づくとすぐ口をとじる。男子ともほとんど口をきいたことがなく、級友全体の前で声を出したり話したりしたことはもちろん一度もない。4年生までは学習中よく腹痛を訴え家人が迎えにきて家に帰ると、とたんになおるといことがしばしばあったという。しかし、家庭では別人のように表情が明るくなり、のびのびとはしゃいでおり、特に休日には近所の友だちを集めて遊びの中心になっているという。

#### 3 本人の状況

\*白根市庄瀬小学校

## (1) 性格

教師に対しては、ひとこともしゃべってくれず、また友だちと遊んでいても教師が近づくと固い態度になって、はだかのままの自己を見せてくれない。



(図1) Y・G性格検査のプロフィール

●———● 46・12・1実施

○-----○ 47・7・20実施

## (2) 知能および学業成績

知能 2年生( S43・6・25 ) 田中B式知能検査 知能偏差値・54  
4年生( S45・6・10 ) 田中B式知能検査 知能偏差値・53

学業成績は、手先が器用で運動能力もあるので、図工・体育は「3」の段階で中位であるが、思考を要する学習は劣っており、学年を追うに従って成績は低下する傾向にある。

AAI ( S46・11・30 実施 ) の結果では、学習技術にも問題があるが、特に学習環境と、精神、身体領域がよくなく、なかでも家庭の心理的環境と本人の自主的態度に問題がある。

## (3) 家庭環境

家族は父(42才)母(43才)兄(中学2年)と本人の4人家族で、家で電気器具店を営んでいる。父は学級委員、母は婦人部委員の役にあり、学校の仕事に対しては協力的であるが、父は、考え方がややかたく一徹なところがあり、PTAをぞで意見の対立をみることがある。本人に対しては、学校における特殊な状態をかわいそうだという気もあるせいか、多分にあまやかし、わがままにさせている傾向が見られる。親子関係診断テスト( S46・12・7 実施 ) の結果からは、父親の子どもに対する態度には、無関心、放任の傾向が見られ、母親の態度には、干渉・不安・過保護的傾向が見られる。しつけ、態度の一貫性の欠如とともに、父親とのしつけの不一致を示している。かん黙の問題については、今までの担任も、初めは心配してくれるが、どうにもならなかったからしかたがない、そのうちになんとかなるだろうというあきらめが見られ、積極的な指導は見られなかった。

## (4) 友人関係

K子の交友範囲はせまい。学校では家の近くの2・3人の同級の女児と接するだけである。この友人は、常にK子をいたわり、せわをやっている。班や係の仕事でも、これらの児童と組ませないとい

Y-G性格検査( S46・12・1 実施 ) の結果では、E型(不安定不適應消極型の単型)を示しており、特に抑うつ性、神経質傾向が著しく社会的内向が強い。悪い面が中にもるとノイローゼ傾向が強く、無気力、受動的で、たえず何か悩まされているということになる。

P-Fスタディ( S46・12・1 実施 ) の結果からは、社会適応性が低く、自分を守るために他を攻撃する傾向がみられ、問題解決にあたっては依存的で社会性の発達のおくれていることがうかがえる。また、抑圧傾向が強い。

以上のような性格検査の結果、非常に自己保身的で、自分が中心になれない不都合な世界においては、かたくなに心をとざしているK子の内面がうかがえるような気がした。



こんでしまって活動ができなくなる。級友全体もK子は特別だという見方をして、男子は無関心またはどちらかという冷たい態度、女子の一部はいつも本人のいごこちがよいようにかばってやる傾向がある。家庭では自分から外に遊びに出ることは少なく、家に友だちをよんで自分が中心になって遊ぶ。

#### IV 指導の経過

##### 1 指導方針

かん黙の原因もわからず、過去4年間、それぞれ担任教師が努力を続けてきたのであるが、ますますかたくなに心をとさしてきた過去を考へ、次のような方針を立てた。

###### (1) 本人に対して

- ・まず教師に対する警戒心を解かせ、親しみを持たせるために、スキンシップなどの手法によって常に暖い受容的な態度で接する。
- ・生活ノートなどをとおして心の会話を続け、かたくなな心を解きほぐしていく。
- ・得意な教科などをとおして自信を持たせ、積極的に活動していこうとする目を開かせる。

###### (2) 学級集団に対して

- ・おたがいに友だちを大切にし合い、暖い心ではげまし合う学級のふんい気をつくり出す。
- ・K子は話せない子、という特別視をとり除き、みんなの力でなんとか話せるようにしてやろうじゃないかという気持ちを凝集させる。

###### (3) 父母に対して

教師への信頼感を持ってもらえるよう努力すると同時に、家庭での自主的な生活態度がかん黙の壁を破る要因につながるかも知れないことを理解してもらって、かん黙そのものにはあまり神経を使わず、側面的に援助することを依頼する。

##### 2 指導の経過

###### (1) 5年1学期 — かたさが少しとれ教師に笑顔を見せるようになった。 —

休憩時には、できるだけだけた話題で話しかけたり、肩をたたいたり腕でかかえたりしてからだにふれ、またフォークダンスを一緒におどったりして親しんだ。7月にはいって水泳指導が始まったとき、水に顔をつけることさえできない状態だったが、「先生がそばについているからぜったい心配ないよ。」と、はげましはげまし指導したら信頼してからだをあずけるようになり10mぐらい泳げるようになった。口こそきかないが、しだいに笑顔を見せるようになりかたさがとれてきた。

###### (2) 5年2学期 — 学習や係の仕事にやゝ積極性を見せはじめ開放的な明るい表情になる。 —

担任当初、学習中個人指導をするとかたくなな態度をとっていたが、折りにふれ文字のきれいなことや、漢字や計算のよくできることなどをほめてやったら、自分から進んでノートを持ってきてわからないところをきくようになった。(会話はない、指でさす。)

10月……ことばに出さないがそばによってきて認めてもらいたいような様子を示し始めたので、漢

字テストの採点をする仕事をたのんだ。K子は目を輝かせて仕事にとりくんだ。疑問の箇所はだまって指さし、じょうずに採点してくれた。これを機会にK子にできそうな仕事はできるだけのみ、接触する友だちの範囲もふやして、意図的に男子も交えて仕事にあたらせた。

11月……音楽会でオルガンパートを受け持ちじょうずにやれたので、全校合唱の伴奏をやってくれないかとたのんでみた。最初ピアノのところまでやってきたが、もじもじしてなかなか鍵盤に手をふれようとしなないので「Yさんと一緒にやっごらん。」といったら練習を始め、当日はむしろ楽しげなほこらしげな表情で全校の前で上手に伴奏した。

12月……保健委員会に属していたので、養護教諭の協力も得て、できるだけ話しかけたり、仕事にたずさわるようしむけてもらう。たまたまクラスの男子2名が熱を出し保健室で休んでいた時、かいがいしく給食のせわをしたり、かばんの始末をしてやったりして積極的に活動した。これを機会に全校の先生方にもK子の状態を理解してもらい、折りにふれ援助の手をさしのべてくれるよう依頼する。

毎朝「おはよう」と声をかけるのだが、依然として声は返ってこないが「はい」というような口形を見せるようになったので「どうして先生と話せないの。」と聞いたら、次のような文を書いてくれた。「はずかしくてきまりが悪いし、しゃべろうと思っても、つい前にでるとほっとしていえないからいつになってもいえない!!」(原文のまま)この下に自分の肩をだいている教師の絵がかいてあった。

今までもこれに類したことを聞いたことがあったが、それにふれるとかえって固く心をとざすような傾向があったので、ずっとふれないうえだったが、この時初めて自分のしゃべれないわけについて自分なりに書いてくれた。

(3) 5年3学期 — 本格的に生活ノートを書き始め、教師との心の会話が始まった。自分のしゃべれないかなしみを見つめ、しゃべりたいという意欲が高まってきている。 —

2学期の頃からクラス全員に生活ノートを書かせていたが、K子もごくかんたんなできごとや絵などを書いてきていたが、2月14日から新しい分厚い日記帳を買ってきて、本格的に生活ノートを書き始めた。この日からK子との心の会話が始まった。今まで言いたくて言えなかったことが一時にあふれてくるような感じで、いろいろなできごとや感想を思いきりぶつけてくるような感じであった。

生活ノートから抜粋(特にかん黙に関係のある部分、原文のまま)

2/15 わたしはどうして返事ができないのかなとおもう。そのために勉強がおくれるようにたまらない。どうかして返事ができるようにになりたい。だってこのくみはいいくみだもん、だから早くへんじができるようになってみんなとお話したい。

3/2 わたしはいつも生活ノートをだしているから先生と話をしているようにたのしい。今までで5年生がいちばんたのしかった。だって勉強がたのしくて先生もよい先生だからだ。これからもこの組をおしえてくれないかな。

3/8 わたしはしゃべられる人がうらやましい。たまにわるい人を注意すると、T君が「しゃべったいや、しゃべったいや」などといってわたしはゆうきをなくします。でもHさんやMさんが、あたたかく「そんなのきにしんないや」といってくるとき、とてもうれしいと思った。そんなこといわれるとみんなの前でいられないきがするときもある。



3/22 きのう先生の赤い字をよんで、6年生になるまでよい方へいくなと思った。それには、もっと勉強に力を入れなければならないと思った。それと、もう一しゅもくめざしていきたい。それは、先生と話ができるように努力したい。でも話ができるように努力しすぎて勉強がおくれたらこれもたいへんだから、きらくにやっていきたい。しゃべれる人はもうすっかりなれてなにも感じないかもしれなけれど、わたしには努力がいることです。

上記のようにK子の気持ちが高まってきているので、K子の了解を得て、クラス全員にK子の生活ノートを読んでやったり、みんなではげまし合うことの大切さを話し合ったりして、暖いクラスづくりにつとめた。その結果男の子たちも気らくにK子に話しかけるようになり、「はよ、先生としゃべられるようになれいや」などとほげましたり、K子の食べ残しの給食を「食べてやるるか」などといって親近感を見せたり、K子の2つにあんだ長いぐみをひっぱって「キャッキャッ」とふざけあったりするようになり、K子は男子とは依然として口こそあまりきかないが、気らくにクラス全体の中にとけこんでいく感じを見せ、クラス全体もK子を暖く受容し始めた。

#### (4) 6年1学期 — とうとうK子の声を聞くことができた —

6年になってもずっと生活ノートを続け、心の結びつきは十分うまくいっているように思えるのだが依然として口をきこうとはしない。6月に、場の設定も考慮して、班編成をやりなおしたり、専門委員会(給食)に積極的にとり組ませたり、他の先生方からも努めて話しかけてもらったりした。また、父母にも気持ちが十分高まってきていることを話して、電話戦術などの協力を改めて依頼したりした。

K子も生活ノートをとおして心の会話を続けているうちに、物の見方、考え方が次第にかわってきて、自己反省の伴わない一方的な攻撃性が次第に姿を消し、友だちの立場や、班全体クラス全体の立場をみて物を考えるようになり、また学習への興味も増して、勉強はおもしろいと書いてくるようになり、そのためにも、早く先生やクラスみんなと話せるようになりたいという意欲がますます高まってきた。

生活ノートから

6/13 きのうの夜、おとうさんと話し合いをやった。その問題に、どうして先生と話ができないんだって問題がでた。わたしはゆうだけのことをゆった。そうしたらおとうさんがへんなことをいいたした。「それならしゃべられるくすりかってきてやるな」って。そんなくすりあるわけがないと思った。わたしは自分の力で先生と話したい。自分の力の中でがんばっていきたい。

6/21 わたしは心の中で夏休みにはいる間にぜったい先生としゃべってみるってけっ心した。わたしはもうぜったいしゃべられる。ぜったいに。わたしはいつも心の中で先生としゃべってみたいと思っていました。でも、つつい先生と出あうといえませんが。それは、わたしのわがままなのでおしてゆきたいと思う。

6/22 お茶の先生にだけしゃべれて先生と話ができないわけがないとしみじみ思った。それにお茶の先生と渡辺先生をくらべると、渡辺先生の方がやさしそうだと思った。先生と話ができないことはつらい。先生、またいつかでんわをかけてください。こんどはぜったいしゃべってみます。やくそく(じしんがあるから)

このように書いてきたので、22日の夜また電話した。今までも母に協力を依頼して何回か電話をか



けたが、一度も声を聞くことができなかった。この日は一計を案じて、母に先生からだと言わないで取りついでくれるよう頼んだら「もしもし」というはっきりした声がかえってきた。はっとするほどうれしかった。少し細いが明るくよくとおる声だ。K子の声を初めて聞いた。彼女も先生からだと知ってはっとし、一時はためらいを見せたが、かまわず話しかけたら「はいはい」という返事だけは返してきた。

翌日の生活ノートには、「先生、でんわをかけてくれてありがとうございました。わたしはとてもうれしかった。だってはじめて先生としゃべれたんだもん、このままずっとつづけていくと、みんなとしゃべってみたいと思います。」と、喜びをいっぱい伝えてきた。この日から電話をとおしてK子との会話が始めた。しかし学校では友だちの手前はずかしと訴え、1週間くらい声を出さなかったが、親しい友だちを交えて話しかけているうちに次第に慣れて、学校でもとうとう口をきくようになった。クラス全員も、とても喜んでくれて、なかには涙を流して感激している子もあり、これがまたK子を力づけた。

#### 生活ノートから

6/30 きょうはとても楽しいうれしい気持ちだった。あんなにみんながわたしのことを思ってくれてくれるなんてとてもおもえないくらいに思えた。ゆめのように思えた。わたしはあのときみんなにおわびをいいたかった。先生にもわたしにもこんなしあわせな日はなかった。

この日以来、K子の世界は変わっていったように思える。ちなみに7月20日実施のY-G性格検査は、A E型を示している。両親は、赤飯をたいて祝ってやったという。

(5) 6年の2学期にはいって教師とは話せるようになったが、クラス全員の前ではどうしても話せないで、国語の本の朗読や作文発表などはあらかじめテープにふきこんでおいて、テープコーダーの後に立って発表するというようなことを度々やった。11月30日に書いた「わたしの性質」という作文はK子の内面をよく吐露している。小グループの中では比較的自由に話すようになり、男の子とも談笑できるようになった。また、他の先生方とも「おはよう」程度のあいさつはかわすようになった。

こうして8学期を迎え、K子は口数こそあまり多くはないが、心の自由をとり戻して明るい伸び伸びとした生活を送っているようだった。ここに1つ浅された問題は中学進学だった。果たしてK子がこのままの生活態度を持ち続けることができるだろうか。卒業にあたり、中学にはいったらひとり立ちしなければならぬことについてよく話し合い、父母とも懇談を重ねて援助を依頼した。

入学式の日、K子は元気よく「はい」と返事をしたという。これをきっかけに教室でも必要に応じて発表し、先生方からも話しかけられれば普通に答えるという。また、バレー部にはいって上級生と共に元気で活躍している。中学にはいった今も、K子は生活ノートを書き続け、たびたび見せにくる。

#### V おわりに

K子が入学以来、なぜかたくなに口をとざし続けたか、2年間の彼女との交流をとおして、心を開かせるかぎは、暖い共感と根気以外にはないように思えた。また、学級担任としては、常時特定の児童にだけ心をかけ続けることは困難であり、度々根負けしそうになったことも事実であったが、K子の指導をとおして学級集団全体を教育相談的な気持ちで経営しようと思ったとき、目が開けてきたように思えた。

K子との出会いは、私に本当の意味での教育相談的な目を開かせてくれた。